

熊本市教育センター教員研修（道徳教育）における 大学教員と現職教員の連携の試み

八幡英幸

On Collaboration between an Academic Staff and School Teachers in Teacher Training for Moral Education at Kumamoto City Education Center

Hideyuki YAHATA

はじめに

熊本市教育センターでは、数多くの現職教員向け研修プログラムが提供されており、その中には小・中学校の教員を対象とする道徳教育に関する研修も含まれている。本稿の著者は数年前から、そうした研修のうち2つを担当している。具体的には、毎年6月頃に10年経験者研修の一環として開講されるものと、夏季休業中に希望者を集め、専門的研修の一つとして開講されるものがそれである。

法定研修である前者では、同センターの指導主事との協議に基づき、事前に指定した授業作りの課題についての班別協議を中心とする研修を実施している。筆者は、そこでの自分の役割は、研修の目的や班別協議の手順を明確化するとともに、参加者（同程度の経験年数を持つ教員）相互の交流や学び合いを促進すること、つまりファシリテーターとしての役割を果たすことにあると考えている。

他方、自由参加の形で行われる後者の場合には、参加者の人数、校種、経験年数が予想しにくいという問題がある。また、参加理由についても、道徳の授業作りに関心があり、さらに知識を深めたいから、あるいは逆に、道徳が苦手、授業作りで苦労しているから、さらには、勤務校が道徳に関する研究指定を受けたためなど、非常に多様である。そのため、課題の設定そのものがなかなか難しい。

このようなことから、ここ3年（平成24・25・26年度）の専門的研修では、道徳の授業作りの経験を豊富に持つ現職教員をもう一人講師として招くという工夫をしている。このもう一人の講師とは、課題の設定や資料の選択の段階から何度も打ち合わせを行う。また、研修当日の進行や班別協議の取りまとめも、いわば二人三脚の形で行うことにより、参加者との応答をよりきめ細かく行うことができ、現職

教員が持つ多様なニーズに応えることができるのではないかと考えている。

大変前置きが長くなったが、本稿では過去3年間のこの研修の内容を年度ごとに紹介するとともに、その成果と課題をまとめていきたいと思う。生涯を通じ学び続ける教員の養成が求められ、養成と研修の一体化に向けた種々の試みが行われる中で、この報告が何かの参考になれば幸いである。

1. 平成24年度の研修

日時	平成24年7月26日（木）
テーマ	生命尊重に関する総合単元的道徳学習
担当者	八幡英幸（熊本大学教育学部） 須藤聡（熊本市立桜木東小学校（当時））
参加者	61名（小学校45名、中学校16名）

(1) テーマ設定及び資料の準備

平成24年度の研修テーマを「生命尊重に関する総合単元的道徳学習」とした理由はいくつかある。第一の理由としては、平成20年の学習指導要領改訂により、この項目が3-(2)から3-(1)に移され、より一層重点的な取扱いが求められるようになったということがある。また、第二の理由としては、生命尊重は、体験活動を含めた多面的な取り組みを必要とする項目であり、総合単元的道徳学習のテーマにふさわしいということがある。さらに、第三の理由としては、総合単元的道徳学習（またはそれに類する取り組み）が熊本市内のいくつかの研究指定校で実施されており、他校でもこれに対する関心が高まっていたということがある。

教育センターの指導主事を交えた最初の打ち合わせでは、まず以上のような理由から、「生命尊重に関する総合単元的道徳学習」を研修全体のテーマとすることで意見の一致を見た。さらに、総合単元的道徳学習の核となる道徳の時間の授業に関して、小学

校・中学校それぞれについて魅力的な資料を一つずつ選定し、研修用資料とすることを決めた。

次の打ち合わせでは、それぞれが今回の研修にふさわしいと考える資料を持ち寄り、意見交換を行った。その結果、選ばれたのは、資料「ヌチヌグスージ（いのちのまつり）」（『明るい心で どうとく3』東京書籍）と、資料「ドナーと共に生きる」（『中学道徳3 明日をひらく』東京書籍）である。

前者（小学校中学年用資料）は、主人公が訪れた南の島で、ご先祖さまに感謝するまつりをする人々と出会い、命は数えきれないほど多くの人から受けついだものであることに気づくという内容である。また、後者（中学校用資料）は、重い肝臓病を持って生まれ、外国で移植手術を受けて帰国した主人公が、若者へと成長した後、ドナーへの感謝と生きる決意を手紙に記すという内容である。

研修では、これらの資料の取り扱いを考える一方、それを他のどのような教育活動（他の教科の学習や体験活動）と結びつけるかを班別協議のテーマとすることにした。すなわち、生命尊重に関する一時間の道徳授業を中心に据えて、ミニ総合単元を構成してみよう、そのためのアイデアを出し合ってみよう、というわけである。

(2)研修当日の様様（前半約90分）

研修当日は、まず筆者の方から、総合単元的道徳学習の学習指導要領上の位置づけや、生命尊重という内容項目の系統性（小学校低学年～中学校までの学習課題）、生命尊重に関する資料の特徴などに関する説明を行った。

内容項目の系統性を見ていくと、そこには、①「生命をどうとらえるか」、②「生命に対し、どのような態度をとるか」という二つの大きな課題があることが見えてくる。また、学年が上がるにつれ、①から②へと内容の比重が移っていくことがわかる。さらに、この内容項目に関係づけられる資料の特徴については、学年ごとに、動植物、人間、誕生、成長、食物、けが・病気、救命、戦争、死、祖先などのキーワードがどのように登場してくるかを整理した結果を示した（図1参照）。

これらの観点から見ると、小学校用資料「ヌチヌグスージ」は、まさに①「生命をどうとらえるか」という課題に対応するものであり、キーワードとしては人間、誕生、祖先を含んでいる。他方、中学校用資料「ドナーと共に生きる」は、②「生命に対し、どのような態度をとるか」という課題に対応するものであり、人間、病気、救命をキーワードとするものである。

学年	動物植物	人間	誕生存在	成長鼓動	けが 病気 事故 災害	救命 献身	死	食物	記憶 先祖	戦争
1	6	4	4	3	2			1		
2	5	4	4	2	2		3	1		
3	2	5	2		4	2	1		1	
4	2	5	2		4	2	2	1		
5	1	7	1		6	2	3		1	
6	1	6	1		2	7	2			2

図1 各学年の資料の内容（小学校）

筆者はさらに、生命をより深くとらえるための視点として、授業者がその本質に関わるキーワード（例：関係性、肯定性、有限性、連続性）を持つことの大切さや、生命に関する道徳学習に盛り込みたい要素（①語り合い、耳を傾け合うこと、②様々な表現に触れること、③自らも表現すること、④様々な課題に立ち向かうこと）についても触れた。これらの要素は、道徳の時間の取り組みだけではなく、それを核とする総合単元的学習を組むことによって取り入れやすくなる内容である。

筆者はおよそ以上のような内容を話したところで、もう一人の講師である須藤教諭に登壇をお願いした。須藤教諭はまず、総合単元的道徳学習を「特定の道徳的価値に関する子どもたちの意識の流れを押さえ、主体的、多面的に道徳学習を発展させられるように計画・支援していく過程」と位置づけた上で、テーマ設定の方法、期間や時期、そこに組み込む体験活動の内容、道徳の時間の位置づけ、構想図の描き方など、豊富な実践経験を踏まえて数多くのヒントを提供していただいた。

例えば、学習を実施する期間については、子どもの意識はそれほど長くは続かないため、二週間程度の小さな単元から始めてはどうか、大きな単元でも一学期間で終わらせたほうがよい、とのことであった。また、計画段階での綿密さと、実践段階での柔軟さ（子どもの意識の変化に合わせた修正）が必要だということ、体験を学習に生かすために、記録が重要だということ、突発的な出来事も大切にすることなどがポイントとして示された。

単元全体の中での道徳の時間の位置づけについては、単元の入り口に置く場合、途中に置く場合、出口に置く場合で、それぞれ期待される効果が異なるということに留意する必要がある。また、道徳の時間において、他の教科の学習や体験活動とのつながり

りを意識させる方法やその効果についても、導入でそうする場合と、中心場面でそうする場合、振り返りの場面でそうする場合、終末でそうする場合とで違いがある。

須藤教諭はこのような点に注意をうながした後、実際に行われた総合単元的道徳学習の構想図（小学校用・中学校用）をいくつか紹介し、そこには非常に多様な可能性があることを示していただいた。また、その一方で、高すぎる課題を設定しないこと、欲張らずに学習や活動をいくつかに絞ること、実践がうまく行かなくても、成長を認め、励ますことなどが学習の成功のポイントとして示され、研修の前半が終了した。

(3)研修当日の様様（後半約90分）

研修の後半では、前述の資料「ヌチヌグスージ」（小学校中学年）と「ドナーと共に生きる」（中学校）を用いた道徳授業を行うことを前提として、それを中心としてどのような総合単元的学習を構成するかを考えた。進め方としては、最初に各参加者のアイデアをワークシートにまとめてもらい、それに基づく班別協議（各班5～6名）に移った。各班で協議結果をまとめる際には、須藤教諭持参のホワイトボードシートを使用してもらい、協議結果を発表する際にもこれを活用してもらった。

計12班（小学校9班，中学校3班）からの報告には実に様々なアイデアが含まれており、各校での今後の取り組みにとって非常に有益なヒントを与えるものとなった。研修後のアンケートに対しても、「道徳教育は、(学校の)教育活動全体で行うという意味が分かりました。一つの資料から、構想がこんなにも膨らんでいくとは思いませんでした」といった感想が寄せられた。

ただし、小学校教員による協議と比べ、中学校教員による協議では、総合単元的学習の構成に関して若干アイデアが出にくい傾向が見られた。このことは、一つには、小学校教員が全教科を担当し、学校生活全体から学習素材を拾い集めることができる存在であるのに対し、中学校教員は特定の教科の指導を担当する存在であるという違いから来るものではないかと思われる。このような校種の違いに配慮した研修のあり方を考えることは（本稿の執筆時点でもなお）大きな課題である。

2. 平成25年度の研修

日時	平成25年7月30日（火）
テーマ	思考力・判断力を育てる道徳学習
担当者	八幡英幸（熊本大学教育学部） 坂口一成（熊本市立大江小学校）
参加者	43名（小学校35名，中学校8名）

(1)テーマ設定及び資料の準備

平成24年度の研修で筆者とペアを組んでいただいた須藤聡教諭（平成25年度から川尻小学校教頭）は、熊本大学教育学部附属小学校で道徳教育の研究を行った経験の持ち主である。この例に倣い、平成25年度の研修では、同年4月の異動で附属小学校から熊本市立大江小学校に移られた坂口一成教諭に担当をお願いし、快諾していただいた。その際、研修のテーマを「思考力・判断力を育てる道徳学習」とすることについても意見の一致を見た。

このテーマを選んだ最大の理由は、それが附属小学校における坂口教諭の研究の大きな柱だったからである。同教諭が附属小学校に在籍された六年間のあいだ、筆者はその研究の歩みをいわば伴走者として見てきた立場にある。その蓄積を生かし、熊本市の教員研修、ひいては熊本における道徳教育の質の向上に貢献したいというのが私たちの共通した願いであった。また、そのような多分に個人的な理由を離れても、「思考力・判断力を育てる道徳学習」というテーマは、言語活動の充実を求める現行の学習指導要領や時代の要請に合致したものであり、十分説得力を持つものと考えた。

研修用資料としては、小学年高学年用資料「ロレンゾの友達」（文部科学省道徳教育指導資料）を選び、本年度は小学校教員も中学校教員も一緒に授業構想について話し合っていくことにした。この資料は、二十年ぶりに帰郷し、三人の旧友と再会する約束をしている男（ロレンゾ）について、会社の金を持ち逃げし、警察に追われているという話が伝わるところから始まる。この話を聞いた三人の旧友（アンドレ、サバイユ、ニコライ）は、逃がしてやる、自首をすすめる、警察に知らせる、という三者三様の考えを持つという内容である。

この資料は、一読してどの登場人物の判断が正しいかがわかるようなものではない。資料に登場する三人の旧友は、それぞれにロレンゾのことを思い、上記のような判断をするからである。この資料を読んだ子どもたちは（あるいは大人であっても）、三人の判断のうちどれが一番正しいのか、自分ならどう

するかなどを考えさせられることになる。そういう意味で、この資料は「思考力・判断力を育てる道徳学習」に適していると思われる。

研修の前半では、まず筆者から、この研修のテーマと学習指導要領の関係や、附属小学校で行われた坂口教諭の授業の特徴を説明した後、坂口教諭からその実際の様子をくわしく紹介してもらうことにした。また、研修の後半では、上述の資料「ロレンゾの友達」を用いて授業をする場合、どのような工夫をすればよいのかを班別協議を交えて考えてもらうことにした。

(2)研修当日の様様（前半約90分）

筆者からの説明でまず確認したのは、現行の学習指導要領の改正点である。周知の通り、同要領の総則では、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」ことが新たに要請された。他方、道徳教育の目標は、以前より「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」とされており、不変である。道徳教育に関しては、心情面・態度面の指導も依然として重要であるが、今後は思考力、判断力など、認知面の指導にも力を入れていく必要があると考えられる。

このことと深く関係していると考えられるのが、小学校学習指導要領の次のような変化である。ここでは、道徳の時間における指導の課題として、各教科等における道徳教育を「補充、深化、統合」し、「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成する」ことが求められている。このうち下線部は、今回の改訂で加筆された内容である。小学校段階から自分の考えを持つことの重要性が強調されている。

また、「内容の取扱い」にもこれに対応する変化が見られる。すなわち、「自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自分の成長を実感できるよう工夫すること」が新たな要請として付け加えられたのである。

この研修では、特にこの点に注目し、道徳の時間の学習の中で、①自分の考えを表現する、②他者の考えに接する、③自分の考えを深める、④自分の成長を実感する、という流れを生み出すにはどうすればよいかを授業構想のワークシートや後半の班別協議でも考えてもらった。

筆者はさらに、附属小学校で行われた坂口教諭の授業「相手の立場に立つとは？」（図2参照）と「夢が自分を成長させる」（図3参照）を例に挙げ、その

実践例1：相手の立場に立つとは？

- **資料：「父の言葉」**（脚の病気が治った主人公は、松葉杖の子の姿を見て隠れるが…）

か
か
か
わ
り
合
い

- **自分たちの判断について考える**
隠れる、話しかける、挨拶をする…、なぜかと言うと…
- **資料に戻り、登場人物の判断について考え直す**
でも、お父さんはなぜ、「行ってお話しすればいい」と言ったのだろう
- **判断をふり返り、道徳的価値をとらえ直す**
どちらも相手のことを考えてはいるが、より深く考えているのは？

図2 実践例1：相手の立場に立つとは？

実践例2：夢が自分を成長させる

- **資料：「夢のオリンピック」**（30歳を超え、初めて五輪に出場した主人公は、次の五輪も目指すが…）

か
か
か
わ
り
合
い

- **1時間目：自分たちの判断について考える**
出場を目指す、そこまでなくてもいい…、なぜかと言うと…
- **2時間目：登場人物の判断について考え直す**
主人公はなぜ、30歳を超えてもお五輪出場の夢を追い続けるのだろう
- **判断をふり返り、道徳的価値をとらえ直す**
叶わなくても、夢や目標を持つこと自体が素晴らしいのでは

図3 実践例2：夢が自分を成長させる

特徴を説明した。

これらの授業の特徴としては、①登場人物の判断や行為に疑問が生じたり、悩みや迷いに共感できる資料を選ぶこと、②資料に描かれた状況を踏まえ、判断とその理由を問う発問を中心に授業を組み立てること、③展開前段と後段の区別にはあまりこだわらず、資料の登場人物の判断と、自分たちの判断のあいだを行き来しながら考えを深めていくことなどがある。このような工夫により、自分たちの判断を振り返り、道徳的価値を捉え直すよう促すのがこれらの授業に共通するねらいである。

筆者はおおよそ以上のような内容を話した後、これらの授業の実践者である坂口教諭に登壇を求めた。同教諭からは、上記の実践例のうち、特に「相手の立場に立つとは？」について、指導案や授業記録（逐語録）、さらには記録映像も交えて授業の実際を紹介していただいた。

この授業に用いられた資料「父の言葉—黒柳徹子」（『5年生の道徳』文溪堂）は、幼い頃、重い病気で入院していたが、その後回復し、歩くことができる

ようになった作者が、同じ病気で入院していた少女と再び出会った際の様子を描いたものである。松葉杖をついたままの少女の姿を見て、話しかけることもできず隠れてしまう作者に対し、父は「そんなにかわいそうだと思うなら、かくれずに、行ってお話ししなさい」と諭すという内容である。この資料はまさに、登場人物の判断や行為に疑問が生じたり、悩みや迷いに共感できる資料の一つである。

授業展開の最大の特徴は、板書や挿絵を用いて資料の内容を整理した後すぐに、展開の早い段階で、「あなたが、「わたし」(作者) だったらどうしますか」という単刀直入な問いをぶつけたことにある。この発問に続き、ワークシートへの記入、グループでの話し合い、全体での話し合いといった言語活動が活発に行われた。



図4 授業風景

一般的な道徳授業の場合、展開前段では、資料に即して登場人物の思いや考えを理解させ、そこに含まれる道徳的価値に気づかせようとするのが普通である。また、「あなたならどうしますか」という発問は、これまでむしろ避けるべきだと言われることが多かった。子どもたちが周囲を気にして本音を言わなくなる、本音を言った場合にはそのことで傷つく可能性があるなどの理由から、このような発問は避けられてきたのである。

ところが、思考力・判断力の育成をねらいとする坂口教諭の授業（注：すべての授業ではなく、そのようなねらいで行われる授業）では、展開前段からそのような問いをぶつけ、子どもたちに話し合わせるが多い。その前提として、道徳の時間には何でも話せる、誰のどんな意見でも真剣に受け止めてもらえる、というクラスの雰囲気作りが行われているということがある。従来言われてきたタブー（「あなたならどうしますか」と問うのはよくない）は、そのような雰囲気作りができたならば、タブーでは

なくなる可能性がある。

確かに、このように自分たちの判断を早い段階から語らせる展開にした場合、子どもたちの議論は、資料の内容や授業者のねらいからかなり外れたところで盛り上がりを見せることもある。坂口教諭は、それにも根気よく付き合いながら、子どもたち自身の考えと資料の内容とをできる限り深い次元で出合わせようと努める。

そのための手立てとして、むしろ展開後段で資料に戻って考えさせるということがある。上記の授業の場合には、女の子の姿を見て隠れる、隠れないをめぐって様々な意見が出たところで、題名にもある父の言葉にあらためて焦点をあてた。具体的には、「女の子が傷つくかもしれないのに、なぜ、お父さんは「行ってお話ししなさい」と言ったのだろう」という発問を行い、再度、資料の内容について考え直すよう求めたのである。

坂口教諭からは、以上のような展開上の工夫に加え、子どもの思考を促す働きかけとして、じっくり対話する場を確保すること、子どもの語りを可視化すること、さらには、感覚的な言葉、曖昧な言葉を取り上げ、問い返すことなどのポイントが示された。そして最後に、それぞれの考えの深まりを確認し、成長を実感させるための手立てとして、自分の判断が変わったところ、変わった理由を振り返る学習シートを作り、それを内容項目ごとに綴じるという手法が紹介された。

(3)研修当日の様様（後半約90分）

研修の後半で用いたワークシートの内容や班別協議のテーマは、次のように非常にシンプルなものである。

- ①資料の登場人物（アンドレ、サバイユ、ニコライ）それぞれの「考え」に迫らせ、他の児童・生徒の「考え」に触れさせるために、どのような発問をしますか。
- ②自分の生き方（ここでは特に友情）についての「考え」を深めさせ、自分の成長を実感させるためには、どのような手立てが考えられますか。

協議後の各班（計9班、小・中学校混合）からの報告の内容は、坂口教諭がホワイトボードに記録する一方、特徴的な点、注目される点を筆者が指摘するという仕方で全体をまとめていった。

内容の一部を紹介すると、「あなたならどうしますか」という発問については、子どもの実態（思考

力・判断力の育ちなど）をどう見るかによって意見が分かれるようであった。実際、今回の資料の場合、「あなたは三人のうち誰に賛成ですか」という問いかけぐらいから始めるほうが、資料から離れる度合いも少なく、安心して学習を進めることができるように思われる。また、さらに考えを深めさせるための手立てとしては、まず三人の友人の側に立って考えさせた後に、ロレンゾの側からも考えさせてはどうかという意見などが出された。

研修後のアンケートに対しては、「思考力・判断力に焦点をあてた研修内容で新しさを感じました。ワンパターンの指導法に陥っていた自分に気づき、道徳教育に関する視野が広がりました」、さらには、「研修の流れがすばらしく、授業をいかにつくっていくか、夢中になって考えていました。道徳の授業を考えることの楽しさを実感しました」といった感想が寄せられた。

3. 平成26年度の研修

日時	平成26年7月29日（火）
テーマ	思考力・判断力を育てる道徳授業
担当者	八幡英幸（熊本大学教育学部） 坂口一成（熊本市立大江小学校）
参加者	49名（小学校34名，中学校15名）

(1) テーマ設定及び資料の準備

平成26年度の研修は、前年度に引き続き筆者と大江小学校の坂口一成教諭でペアを組んで実施することになった。また、教育センターの指導主事を交えた事前の打ち合わせにより、研修テーマも前年度に引き続き「思考力・判断力を育てる道徳学習」とし、次のような趣旨の研修を行うことで意見の一致を見た。

「登場人物の葛藤を描いた資料を用い、子どもたちに大いに思考、議論させ、しかも道徳的価値へしっかり焦点化する、そのような授業をどう作るか。実践例を参考に、よく知られた資料について、資料の解釈／内容項目の検討／授業のねらいの明確化／資料の提示方法／発問の工夫／道徳的価値への焦点化などについて考え、それぞれの授業構想を語り合う。」（事前打ち合わせの際の資料より）

その後の検討で、実践例としては、前年度の研修で班別協議の課題とした「ロレンゾの友達」を実際に取り扱った大江小学校での坂口教諭の授業を紹介することにした。この研修に連続して参加する人がいた場合、いわば昨年度の種明かしのようになり、面白いのではないかとこの考えもあってのことである。

る。上記の授業については、授業記録（逐語録）や動画も残されていたため、これらを利用することになった。

他方、研修用資料としては、以前から非常によく知られており、雑誌『道徳教育』の最近の特集（2013年2月）でも取り上げられた資料「手品師」を選んだ。後述するように、この資料については、登場人物の行為に対して子どもから様々な意見が出るのが予想されるだけでなく、資料自体の内容を批判する意見や、批判的活用の必要性を指摘する意見がある。また、内容項目への焦点化もなかなか難しいと言われており、いわゆる定番資料の中でもいわば問題作のひとつである。

(2) 研修当日の様様（前半約90分）

研修の前半については、一つ大きく変更した点がある。それは、前年度までの研修では、筆者が先に研修テーマの学習指導要領上の位置づけなどを説明した後に、現職教員（須藤教諭、坂口教諭）が実践例を紹介するという順序であったのに対し、本年度の研修では、この順番を逆にしたという点である。このような変更を行った主な理由としては、理論的な解説を後にしたほうが、明確な問題意識を持って授業構想に取り組むことができるのではないかと考えたことがある。

坂口教諭からはまず、資料「ロレンゾの友達」を用いた授業「よりよい友だち関係を築くには？」の紹介を中心に、思考力・判断力を育てる道徳授業の実際について話していただいた。

実践例：よりよい友だち関係を築くには？
(判断とその理由を問う授業)

か
か
わ
り
合
い

- **資料：「ロレンゾの友だち」**(20年ぶりの再会を前に、ロレンゾが警察に追われているらしいという話を聞いた3人は…)
- **自分たちの判断について話し合う**
あなたは3人のどの考えに賛成ですか、それはなぜですか。
- **資料に戻り、登場人物の判断について考え直す**
あなたがロレンゾだったら、誰の考えがうれしいですか。なぜ、立場が変わると考えにずれが生じるのでしょうか。
- **主題(主要価値)についての考えを深める**
よりよい友人関係を作っていくには、互いの立場や考えの違いを理解しあう必要がある。

図5 実践例：よりよい友だち関係を築くには？

「思考力・判断力を育てる道徳授業」に関する同教諭の基本的な考え方は、子どもたちが日頃、様々な状況の中で行っている判断を話し合いの場に引き出し、それらを共に振り返る中でこそ道徳的価値の捉え直しが生じる、というものである。また、その際

重要になるのが、資料の登場人物が行った判断や行為との比較や、異なる判断をしている他者との対話である。同教諭の授業には、話し合い活動の中で、資料の登場人物や教師までもが対話の輪の中に取り込まれていくという特徴がある。

上述の授業でも、前年度の研修で紹介した授業「相手の立場に立つとは？」と同様、板書や挿絵を用いて資料の内容を整理した後すぐに、「あなた」を主語とする問いをぶつけた。ただし、この授業では、「あなたならどうする」という単刀直入な発問ではなく、「あなたは、三人（アンドレ、サバイユ、ニコライ）のどの考えに賛成ですか」という発問を採用し、資料からあまり離れない形で考えさせた。また、それぞれの意見を出し合う際には、理由に注目しながら聞くよう促し、教師からも「それはなぜ？」という問い返しが必要に応じて行われた。

授業の前半はこのような形で進められたが、その結果、最も多くの子どもが賛成したのは、警察に知らせるというニコライの考えであった。それに次ぎ、自首をすすめるというサバイユの考えが支持を集め、逃がしてやるというアンドレの考えに賛成する意見はほとんど出なかった。

坂口教諭によると、この資料を用いて授業をした場合、子どもたちの反応は概ねこのような結果になる場合が多いという。子どもたちはやはり、道德の授業での「正解」と思われる答えを探し、それを自分の意見として発表する傾向がある。

この授業の最大の特徴は、展開の後半でもう一つの大きな発問「あなたがロレンゾなら、誰の考えが一番うれしいですか」を行い、子どもたちの考えの中にある「ずれ」を明らかにしようとした点にある。実際、この新たな問いの結果、ニコライを支持する意見が大きく減り、サバイユ、さらにはアンドレを支持する立場が増えるという大きな変化が生じた（筆者も授業参観をしていて、この時の変化の大きさには驚かされた）。

坂口教諭はこのような変化に注目し、「なぜ立場が変わるとこのような「ずれ」が生じるのだろう」とさらに問いかけた。そして、友達から正しいことを言われても、受け止めることができないことがある、親しい友人のあいだでも、互いの立場を理解し合うのはなかなか難しい、といったことに気づかせていったのである。子どもたちの思考が真に活性化し、ねらいとする道德的価値（友情）の捉え直しが行われた瞬間であった。

以上のような授業実践の紹介を受け、筆者はこの実践例の特徴を以下の三点にまとめた。①登場人物の判断や行為に疑問が生じたり、悩みや迷いに共感

できる資料を選び、子どもたちの考えを引き出していること、②資料に描かれた状況を踏まえ、判断とその理由を問う発問を中心に授業を組み立てていること、③展開前段と後段の区別にはあまりこだわらず、資料の登場人物の判断と、自分たちの判断のあいだを行き来しながら考えを深めていくという方法をとっていること、がそれである。

この三点は、前年度の研修でも指摘した事項であるが、思考力・判断力を育てる道德授業を行う上で非常に重要である。特に、③の展開の取り扱いについては、学習指導要領解説でも、「道德の時間の学習指導過程は（…）いたずらに固定化、形式化することなく、弾力的に扱うなどの工夫をすることが大切である」とされている点に注意を促した。

筆者からはさらに、このような授業を行う際の前提条件として、次の三点に注意する必要があるということ指摘した。①普段から（特に道德の時間には）何でも言い合える雰囲気を作っておくこと、②提示方法を工夫し、まず資料の理解を確実にすること、③道德的価値に焦点化するための手立てを考えておくこと、がそれである。これらの前提が揃わなければ、逆に本音が出なくなる、資料から離れてしまう、議論が収束しないなどのリスクが高まる。そして、特に③については、研修後半の班別協議で具体的な手立てを考えてもらうことにした。

(3)研修当日の様相（後半約90分）

前述の資料「手品師」は次のような4つの場面からなる。①腕はいいが売れない手品師がいて、大劇場に出るのを夢見て努力していた。②ある日、さびしそうな男の子と出会い、手品で元気づけ、次の日も来ると約束する。③その夜、手品師は友人から大劇場に出る誘いを受け、迷いに迷うが断る。④次の日、手品師はたった一人の客（男の子）の前ですばらしい手品を見せていた。

この資料は一読すると、大舞台に立つという夢に向かったの努力と、男の子へ思いやりや約束との間で葛藤する主人公の物語である。それゆえ、子どもたちにとって、夢と約束のどちらを選ぶかということや、両者の葛藤をどのようにして解決するかということについて考え、話し合うのが自然な流れと言えるだろう。また、そのような学習活動は、内容項目としては向上心・努力と思いやり・親切を同時に扱うものになるだろう。

ところが、この資料は一般的に、誠実さという別の内容項目に関係づけて扱うべきものとされている（作者もそのような意図でこの資料を作成したことを明らかにしている）ため、このことをどう考える

かが一つの大きな問題となる。

この内容項目に関する学習指導要領の記述は、小学校と中学校でやや不連続を感じさせる部分もあるが、全体として、うそ偽りのない、まっすぐな生き方をするを一つの理想として提示している。また、上記の資料が、葛藤の中で見方によれば不器用な、愚かとも思える選択をしながらも、うそ偽りのない生き方をしようとした主人公の姿を描いていることも確かである。

以上を要約すると、資料「手品師」は、一見したところ向上心・努力と思いやり・親切の葛藤を扱いながら、より深い意図としては主人公の誠実な生き方を描いたものだということになる。このような複雑な構造を持つこの資料については、子どもたちの受け止め方が分かれるだけではなく、教師の側にも前述したような様々な意見（資料自体の内容を批判する意見や、批判的活用の必要性を指摘する意見）がある。

そのような多様な受け止め方、多様な意見を率直に出し合いながらも、この資料を通じて誠実さについての考えを深めるような学習はできないだろうか。主人公の判断に賛成したり、主人公と同じような行動をすることはできなくても、主人公のまっすぐな生き方にはやはり私たちの心を打つ部分がある。そのように考え、ワークシートとそれに基づく班別協議（小学校6班、中学校3班、計9班）のテーマは、次のように設定した。

- ①資料「手品師」を用いて、子どもたちに大いに考え、話し合わせる授業をするためには、どのような発問や学習活動を準備するとよいでしょうか。
- ②上述の授業（特に後半）で、主題（主要価値）「誠実さ」にしっかりと焦点化するためには、どのような発問や学習活動を準備するとよいでしょうか。

結果としては、①については、「あなたならどうする」という発問を行うという意見（また、実際そのような発問をしたら、案外、約束を守らず、大劇場に出るという意見が多かったという報告）、主人公はなぜ迷ったのか、なぜ約束を守ることにしたのかという理由を考えさせたいという意見、話し合いの中で意見の分布がどう変わっていくかを可視化したという意見などが出された。

また、②については、手品師が大劇場へ出るのを

断る際に、「僕にとって、大切な約束なんだ」と言った点に注目し、「大切」とはどういうことを考えさせるという意見や、最後に、たった一人の観客（男の子）を前に手品をする主人公の思いを考えさせるという意見、視点を変え、男の子の側から考えさせるという意見などが出された。

ただし、中学校教員を集めた班からは、この資料はもっと批判的に読ませる必要があるという意見や、この資料を用いて上記のような課題に応えることは難しいという意見も出された。

研修後のアンケートに対しては、「教材研究の進め方がわかり、またその難しさも感じました。教材をしっかりと読むことによって、どのような展開の仕方があるのか、様々な意見を聞くことができ参考になりました」、「これまで、資料から離れてしまったり、議論が収束しなかったりすることがありました。今日の研修で学んだ、子どもの考えのズレを引き出すことや、子どもの発問に問い返すことなどを、道徳の時間に意識して指導していきたいと思います」といった声が寄せられている。

しかし、反省点も多い。研修用資料として「手品師」を選択した際に、どこまで実際の研修をイメージできていたかという点、そこには問題があると言わざるを得ない。また、前年度、前々年度に比べると、担当者による打ち合わせの時間も十分ではなかった。結果として、特に中学校教員から出された上記のような意見に対し、その場で十分な受け答えをすることができなかった。より根本的な問題としては、中学校の道徳授業の課題や中学校教員の研修ニーズの把握が十分ではないことがある。

研修担当者としては、このような点をどう改善していくかが今後の課題である。

主要参考文献

- ・岡山県小学校道徳教育研究会・押谷由夫（監修）『子どもとつくる総合単元的な道徳学習』、東洋館出版社、1997年
- ・八幡英幸・坂口一成「様々な状況における行為と道徳的判断を探究しあう道徳学習」（熊本大学教育学部『新学習指導要領キックオフシンポジウム第1弾』、2011年、pp.78-87）
- ・八幡英幸・坂口一成「道徳学習における思考力・判断力・表現力」（熊本大学教育学部『新学習指導要領キックオフシンポジウム第2弾』、2012年、pp.125-138）
- ・特集「徹底研究！資料「手品師」」（『道徳教育』、明治図書、2013年2月）